

23. 食道静脈瘤に対する開腹および開胸・ 開腹術式の比較検討

第一外科学教室

下向博洋 相良憲幸 安富正幸

食道静脈瘤患者に対する経腹的食道離断術、の術後経過について主として内視鏡的所見を中心に述べその効果につき検討した。

昭和50年10月から56年11月までの約6年間に当科に入院した食道静脈瘤患者は36例で、これらの12例に対し摘脾術、経腹的静脈郭清、および食道離断術を標準術式として行なった。いずれも肝硬変症例で、術前吐血の既応のあるものは10例で、緊急手術はなく、手術死亡例もなかった。

術前7例に内視鏡検査が行なわれており、いずれも門脈圧亢進症研究会内視鏡所見記載基準の発赤所見 (R-Csign) 陽性例で、 F_{3-2} 、 $Ls-m$

と高度な静脈瘤であった。術後3か月以内に9例の内視鏡検査を行ない、いずれも、RC(一)、 F_{2-1} 、1例を除き $Lm-i$ と著明な改善をみた。しかし術後の follow-up で2例に静脈瘤からの出血と思われる再吐血があり R-Csign は、術後2~3年で再び陽性となってくるものが多く認められた。出血と最も関係があるといわれる R-Csign が陽性に転じる事は、さらに再出血の症例の出る可能性があり、これは主として血行郭清の程度によるものと考え、現在は経胸的血行郭清も追加し標準術式としている。いまだ術後期間は短いが、再吐血例なく静脈瘤に対する効果はより確実と思われる。